

朝ドラ「カーネーション」の印象に残った台詞

朝食の一時を、つつい見続けていた朝ドラ「カーネーション」が今朝終わった。ファッションデザイナーのコシノ三姉妹を育てた母親の一代ものであったが、印象に残った台詞が2つあった。

台詞の一つは、老いて足を挫い時の「歳をとるちゅうことは、出来たことが出来へんようになる。その怖さに一人で耐えていくということ。」というもの。

自分もそれなりに歳を重ねてくると、体力が衰えてくることから以前に出来ていたことが出来なくなってくることと向き合わなくてはならない葛藤は、何ともしんどい作業。

気力が衰えるのはあれこれ考えてもそれを行動に移す体力が伴わないから、どこかで何かを諦めざるを得なく、その葛藤に自分一人で耐えていかざるを得ないのだろうなあ～。

老いの一番の問題は、思考と体力を始めとする「様々なギャップに気づき、それを乗り越え、修正する力を喪うということ（HP「雑学 BN」の書籍等読後感関係（I）、2004. 3. 6. 「痴呆を生きるということ」を読んで：参照）と言う老人保健施設長の言葉を思い出した。

だが考えようによっては、いわゆる認知症状と言われるものは、この世に神がいるかどうかは知らないが、老いて益々体力や気力のギャップある自らに向き合う怖さ、辛さ、しんどさから、精神的に少しでも解放するために神が人に与えた英知の一つでないかとさえ思う時がある。

もう一つの台詞は、老いてなお洋装ブランドを立ち上げて「老いて生きるちゅうことは、『その歳で、よく…』と言われるような奇跡を起こすこと。」というもの。

振り返って大震災と重ねてふと思うに、我々は報道等から被害を受けた一人ひとりのどれだけたくさんの奇跡を見聞きしていることか。

そして、その奇跡から我々自身がどんなにか生きる意味を問われ、気づかされ、勇気を授かっていることか。

老いに限らず、我々は個性ある一人の人間として、日常生活の中で奇跡を起こすべく生きていると言えるのかも知れない。